二月作品

――☆今月の四人☆（小島ゆかり選）――

捨て駒

島田　暉　神奈川

捨て駒のやうに老い初め居眠れり入道雲の湧きたつ真昼
いつまでも続く真夏を息あへぎ今年は遅し蜩（ひぐらし）の声
検査結果異状はなしと言はれたり息の苦しきこの真夏日を
停車せず新幹線車輌通り過ぎ推理小説めくれてしまふ
本棚の影にあなたはかくれたり今も残れる君の笑顔は

いいやいや

大松達知＊東京

善いもののように赤字で書かれあり純アルコール：14g
妻のおらねば妻怒るなしいいやいやわれのおらねば妻怒るなし
さきくさの中野駅にてぶるぶると字間四分アキのように並んで
父に似た白髪頭を見ていたりぼくでないことだけはわかった
こんなところにぽろんと白い毛が生えて僕のいのちを守ってくれる

月集スバル

樋口ガラス店

田中愛子　埼玉

はな柄を好める人はさびしがりや、言はれてそんな気もする初老
北の窓、南の窓開けうまれ家のひなたの縁で羊かんを食ぶ
間に合はぬこと多けれど古家のえんがはで浴ぶ初冬のひかり
うた詠まぬ友もまたよしにぎやかな絵文字がとどく「詩集おめでとう」
風つよき夜に思ひをり夫婦にていとなむ古き樋口ガラス店

井の頭

鈴木千登世　山口

東京はマスクの人が少なくてマスクを畳み地下鉄（メトロ）に揺らる
三鷹へと向かふ車窓に遠ざかり蜃楼（かひやぐら）めく新宿副都心
木の湿り水の匂ひの樹林行くはじめて歩く秋の武蔵野
コバルトの残像残し翡翠が水を潜りき葦辺より見つ
湧き水へ足ゆるやかに降りてゆく井の頭と讃受けたる水へ

――☆――☆――

水島晴子　兵庫

スロープに散りぼふ落葉夜の灯にかばねのやうに落葉うごかず
梢ちかく身を差し入れて枝剪れる人が垂らせるふたつ足見ゆ
十二回の独白終へて影消えつまた逢ふはなし司馬遼太郎氏
をさな子の歯並さながらあどけなし水木の紅実陽を溜めてをり
胸高に帯よそほへるをとめ子の笑まひ明るしジュネーヴの秋

武田弘之　神奈川

戦時下の地図「山西省」を求め得て乾杯したりき神保町で
稀覯本捜し求めて古書街を巡り歩きし若き日去りぬ
活字本、天金の本数減りて味気なし今の出版界は
「まだ生きてゐたの？」と声を掛け合ひて街に別れし人の名知らず
「闇雲」は雲にはあらず「天晴」が空にあらざるさまにかも似て

高野公彦　千葉

古代から戦のやまぬこの星を太陽は〈戦星〉と呼びゐむ
戦星地球にひそと真向かひて後退りする夜ぞらの銀河
真間川の水のやさしき私語きこえ我ひとりゆく秋の夜の橋
旬を過ぎし人間なれど夜ごと飲むビール、焼酎、和酒、ワイン旨し
思ひ出せぬタレントの名を娘に聞きて老人ざかりを我は楽しむ

奥村晃作＊　東京

コロナ恐れて七回目のワクチン打つ人が結構多く予約取り難し
六回目のワクチンは考えて打たざりしがその六回目を打つことにした
風邪と違いコロナは症状のあれこれに苦しむ人がかなり居るみたい
コロナ恐らく収まらないが死ぬ人が少なくマスクの人も少ない
丸四年ヒトを襲って苦しめて退く気配ないコロナウイルス

森重香代子　山口

すこしづつ彩変へながら紫陽花の咲きのこりをり霜月の庭
雷鳥の子のぬひぐるみ黒柿の机に据ゑて呆然とをり
湯を浴みて横になりたしひたぶるに懇望しをり夕ぐるる頃
かすかなる記憶のなかに祖母はゐて竈に面を照らされてをり
供へ置きし酒盃持ち去りし人のあり墓参のこころ深く傷つく

日影康子　富山

わが部屋の大ガラス戸に近くたつミズキの紅葉日々に濃くなる
月決めの小遣ひに少しプラスせり「友と夕食に」とふ学生の孫へ
「その辺にクマはゐないか」と揶揄はる寺の夕べの門閉めをれば
唐突に黒き鳥影よぎりゆく秋陽の大窓のロールカーテン
吹き荒れし野分の風の収まりて寺の報恩講の空の青さや

影山一男　千葉

志ん朝の廓咄を聞きし夜はちよつといい夢訪ねてきさう
若旦那、大工、女房と使ひわけ志ん朝のこゑ江戸よりひびく
火焔太鼓、文七元結、明烏、中村仲蔵志ん朝よろし
職人の子の血が騒ぐ江戸つ子の喧嘩の啖呵寝しなに聴けば
「ひ」が「し」へと訛る言葉の親しもよオヤジは言つてた「あさししんぶん」

桑原正紀　東京

夏痩せの野良猫クロが秋となり日に二度三度餌を欲りに来ぬ
冬ちかし野良猫クロが丸々と太りて北海道は初雪
スズメ目カラス科オナガがキイキイと庭木に騒ぎ今朝も起こさる
スズメ目スズメ科スズメが本家なら分家のオナガは威張りすぎだな
空に地に冬備へするいのち満ち雪待月を気配ゆたけし

狩野一男　東京

霜月の薄ら日の下ボブ・ディラン「風に吹かれて」「時代は変る」
めんだうはここにあるゆゑ覚悟して日々堂々と此処をたのしむ
菅洋・佐藤千広の両氏去り　東北は　また、さびしくなつた
きつすいの無名者われはコスモスを愛し、同時に母校を愛す
年取つて歌がなかなかできないよ『老いて歌おう』借りさえぐべが

宮里信輝　神奈川

杉山の中腹ゑぐりつくられし杉運搬用の未舗装道路
トラックが二台すがへるほどの道　杉山最奥まで続くなり
杉山の杉の切り出し、運搬がながく休みで道路茫々
厚木市の森林づくりボランティアの秋の二回の草刈り作業
エンジン式刈払機をうならせてボランティアの草刈り作業

小島ゆかり　東京

湯豆腐が食べたくなれば湯豆腐を食べる　無神のしろい幸福
ガザ地区の病院おもふ崩れては崩れては赤く燃ゆる夕雲
麻酔なしの治療を受けるケガの子の恐怖、激痛だれかの子です
戦争を知りすぎた子どもたちがゐる二〇二三ガザ瓦礫地区
パレスチナ、ウクライナ、アフガニスタンの子どものまなこ夜空に光る

木畑紀子　京都

めざめては空のひと日をもてあます老いとなりたり空即是色
青鈍は喪のいろ尼僧の衣いろネズミモチの木実りしづけし
ねずみ年われは愛さむその粒実ねずみの糞に似るネズミモチ
草焼きの煙のにほひをはこびくる風に揺れをり残んのコスモス
尉と姥が杷と箒手に持つはうべなりいざいざ掃除はじめむ

田宮朋子　新潟

渡り来し白鳥の群れ霜月の真夏日に遭ひ戸惑ひをらむ
酥すとはいかなる秘法しぶ柿の渋がとろける甘さに変はる
どんぐりの不作の山の熊おもふグルメの猫にチュールやりつつ
裸木となるに順あり桜、柿、欅、公孫樹が散りて冬来る
『老いの歌』老いざるままに書き残し小高賢逝きやがて十年

津金規雄　神奈川

ボサノバのうたかたの日々のけだるさに壁の白さを告げやらましを
夢のやう、音楽もなく木々の中に白き回転木馬がまはる
午前雨、午後青空の旅にありて夕べにふふむ酒の涼しさ
酔ふほどにディープな話に堕ちてゆくそもまたよけれウマが合ふゆゑ
現実を透かして見ゆる永遠が彼女の生を狂はせてゐる

小山富紀子　京都

東京都三鷹市と宛名したためぬしたためたれど歌はまだ二首
月々に封筒に書く鷹の字が毎度羽ばたきうまく書けない
隼と鳥が喧嘩し雁垂の中にきちんと納まりくれず
今日の鷹すらりと書けて姿良し大空色の封筒の上
封筒に月一度書く鷹の字よ京より東の方へ羽ばたけ

清水正子　神奈川

〈ペイル・ブルー・ドット〉なる地球ひと粒の涙のごとし宇宙画像に
乳と蜜のながるるカナン約束の地は神不在、空爆つづく
アラファトの死後二十年、共存のみち遠のきてガザは瓦礫化
風の花アネモネの咲くカナンの春おもひて待たむ共存の日を
空襲でわが家失ひし遠き日がオーバーラップすガザの子哀れ

小嶋一郎　佐賀

欠伸して耳奥に鳴る音を聞きこころ優しく始まる一日（ひとひ）
怪我のことヤーマチといふ方言を聞かずなりたるこの里に住む
目薬を注したるのちの瞑目もひと日に四たびあな煩はし
木賊をば採り来て磨きゐし祖母を思ひ出すけふ小鍋焦して
右肩を下に寝るとき真事（まこと）なる安堵感あり米寿を過ぎて

後藤美子　北海道

新聞の「今日の歴史」の最初なり「北原白秋死去57歳」
卒寿ちかきおのれをおもひストーブのスイッチを入る霜月三日
かうかうと十三夜月のこれるをあふぎて朝のゴミ捨てにゆく
雨未だ来ず霧ふかしうづまきて手稲山をばすつぽりおほふ
ためらひなく人を殺めて正当化すおそろしき世に生きて在るなり

福士りか　青森

ひかりなき雲の切れ間が傷口のやうに見えたり雪もよひの朝
あすは雪あさつては雨　晩秋の津軽をおほふグレーの絵の具
冬空よりヤコブの梯子下ろされてひかりが色をよみがへらせる
ハロウィンが終はれば時はぴよんと跳び真空パックの餅売られをり
一年のまたたくまに過ぐおほあくびする猫よおまへを見てゐるうちに

藤野早苗　福岡

よつこらしよお邪魔しますと卓に乗る猫を滑らせキイ打ち続く
某（なにがし）の母や女（むすめ）とその名前不詳のひとらの日記読む夜半
しあはせな女は日記書かざりき映（ば）える画像を上げつつ思ふ
横溝さんが名告れば自動的（オートマティカリー）に正史と思ふ昭和生まれは
年毎に夜が長くなるわれのため眠剤となる本のある幸

風間博夫　千葉

年一度会計検査院の検査ありぬ税金使ふ組織に
日本（にっぽん）の国会、内閣、裁判所から独立の唯一の機関
検査院対応部内会議にて図面作成日付チェックす
開発の有効性を述べる機会得たり院からの問ひに応へて
調査官とスムーズな会話できるまで数年かかりきわが辛かりき

奥村晃作歌集　令和5年12月刊　二六〇〇円（税別）　送料三〇〇円
蜘蛛の歌　コスモス叢書第1232篇　六花書林
著者住所　〒175-0092　東京都板橋区赤塚七―一五―一六

福士りか歌集　令和5年11月刊　二三〇〇円（税別）　送料三〇〇円
大空のコントラバス　コスモス叢書第1228篇　柊書房
著者住所　〒036-0233　青森県平川市日沼高田二七―四

田中愛子歌集　令和5年11月刊　二三〇〇円（税別）　送料三〇〇円
秋の水深　コスモス叢書第1229篇　柊書房
著者住所　〒338-0001　埼玉県さいたま市中央区上落合　五―一七―一―七〇六　蓮尾方

橘　芳圀　新潟

和讃詠みかがやきゐしと老年の親鸞を言ふ暁烏敏
忌むべきも捨てぬ如来を疑はず自が身蛇蝎（だかつ）と詠みし親鸞
親鸞が仏智不思議と詠む和讃「変成男子（へんじやうなんし）」は気色の悪し
イロニーか時代思潮を越え得ぬか「変成男子」を親鸞は詠む
晩年を和讃案じて親鸞が逍遥したる京都恋しき

水上　比呂美　東京

東京の地下構内を行く人は大き小さき荷物を曳きぬ
海山のあひだを走る新幹線線路のきはに家、畑、人あり
座りたるまま運ばるる秋の日よ七時間後は武雄温泉
「そんでよか」「よかよ」と応ふるやはらかき会話に佐賀へ来たと思へり
九十の秀島さんの張り声よ歌集上梓の謝辞述ぶるこゑ

鈴木竹志　愛知

マジックリン撒きつつ風呂の黴を取るピンクの黴はいたく手強し
二度、三度マジックリンを撒きたればやうやう黴も退散の体
ピンク黴殲滅せむとマジックリン撒き散らしゐるわれは何者
教員になりたる年の冬休み鎌倉を訪ふ一人旅にて
冬ざれの瑞泉寺にぞ参りたる杉本寺を訪れた後

原賀　瓔子　東京

咲くと、はや散るバラの辺に夢想せり　つぼみ半年、花半年を
六十年たちて気づきぬバッカスが優しい先生だつたつてこと
うんめいの輪に打つ釘をおもはせて、夫の忌日の十五夜曇る
秋暑くカーディガンぬぎ大島のひんやりとした羽織を着たり
わが作りしカレーを最後の晩餐として夫倒る、土曜日だつた
雨やどりした路面店で花びらのやうな小皿を四枚買ひぬ
釉薬を塗りし筆致はぼたん雪一枚ごとに違ふ景あり
美濃焼の器売りたる店のひと雨の強さをしきり言ひたり
ひさかたのあらゆる空の色あつめ器にしたか美濃焼の器
美濃焼の皿に盛りたくなり今朝は作つてみたよルッコラのサラダ

水上　芙季　神奈川

大野　英子　福岡

眠れさうな気がして灯りを消したのち耳元で秋の蚊が騒ぎだす
南中の月と木星、オリオン座眺め過ごしてゐる午前四時
日の出までよんじふさんぷんねむれないままに出かけん月ゆく方へ
明るみてゆく街空をいちはやく騒ぐカラスとわたしのこころ
ねむれないハイつてあるんだいつもより足どりかるく埠頭まで来つ

松尾　祥子　東京

三人が九人に増えて夫偲ぶ十年祭は夏日となりぬ
わちやわちやと孫たちに水かけらるる〈縁（えにし）〉の墓に玉串手向く
十年で四人の孫に恵まれて白髪（しらが）の婆になりたりわれは
「いい男だなあ」と義兄が覗きこむ黒縁写真の夫五十六
二歳児も二礼二拍手一礼し玉串捧ぐ　幸へたまへ

小島　なお＊　東京

家につくまでする電話この声を通貨に行き来する冬の街
言い合いの間に訪れる真空に似たあの時間　昼のオーロラ
相づちの小さな船を押し流し日暮れにはもう沖を埋（うず）める
妹の子宮での日々そののちを電球みたく点りて昼寝
身体じゅうの穴を眠気が掘りすむ生前に花を手向けてもいい

老猫介護するわれをまた椅子のかげより窺へる若猫のくう　小田部　雅子　静岡

淋しいと言へぬ淋しい若猫を抱けばぬくもるわれのさびしさ

給食に頼るしかない子ども増ゆ　政治の灰汁のごとき現実

労働者の汗にも青年の憂ひにもありき〈戦後〉の希望（エスペランサ）

われら世代の錯誤が生みし今ならん未来はあると思ひ込みつつ

ふるさとに林檎を守る人のゐてあちらこちらに脚立たつ秋　斉藤　梢　宮城

白秋が詠みしみづみづしい月を求めてゐたり秋のこころは

うた詠みの母は毎日手紙書く「この施設から出してくれくれ」

日付ある母の手紙を読み終へて母の言葉にまた縛られる

生きゆくは死に近づいてゆくことか　黄の大銀杏眼前に立つ

うたを味わう―食べ物の歌　◉高野公彦

二月の味

《河豚の味わい（『うたを味わう』）より転載》

〈関門の海に小雪のちらつけば河豚が恋しも毒もつ河豚が〉　石田比呂志

冬は、河豚（ふぐ）の季節である。刺し身で食べたり、鍋（いわゆる河豚ちり）で食べたり、空揚げで食べたり、さまざまな食べ方がある。また、河豚の鰭を焼いて酒の中に入れ、ちょっと火にかけてアルコール分を飛ばして飲めば、かぐわしい鰭酒となる。トラフグの鰭がいいそうだ。

刺し身は薄作りにして、ポン酢に紅葉おろしと晒しネギを添える。私の郷里愛媛では、ポン酢としてカボスの搾り汁をよく使った。河豚の肉そのものは淡泊で殆ど味がない。

私の知り合いが松山で板前をしているが、彼の話では、河豚はカボスの香りで食うもので、だからカボスのとれる時期（冬）が河豚の旬なのだ、ということだった。

〈あら何ともなや昨日は過ぎてふくと汁〉　芭蕉

河豚はうまいが、毒がある。昔の人々はびくびくしながら河豚を食べたに違いない。翌日、自分が無事だったので芭蕉はほっと胸をなでおろしながら「ああフク（福）だった」と駄洒落を言ったのである。

河豚の毒は猛烈である。毒は肉には無く、肝臓や卵巣や胃腸などに含まれている。トラフグ一匹で人間十三人を死に至らしめる毒があるそうだ。中ると死ぬので、河豚鍋のことを鉄砲鍋という。テッチリという妙な名前はそこから生まれた。

関門海峡に小雪がちらつき、本格的な冬の到来をしらせる。おや、もう河豚の季節だ。河豚が食いたいね。あれは毒があるけど、だからいっそうスリルがあってうまいもんだ。掲出の歌は、作者のそんな呟きが聞こえてくるような作である。歌集『忘八』より。